埼玉発世界行き奨学生　留学レポート

埼玉親善大使
及川陽菜
留学先：アメリカ
期間：2年間（大学院）

「眠らない街」、「人種のサラダボウル」、「ビッグ・アップル」_____私は2021年9月より、アメリカ・ニューヨーク市にあるニューヨーク市立大学クイーンズ校修士課程に正規留学している。前述した言葉はどれもニューヨークを象徴するニックネームであり、その名の通りこの街は多様性に溢れ、豊かな文化が共存していた。私の通うクイーンズ校も多種多様な人種・宗教の生徒がおり、お互いを尊敬し合いながら勉学に励んでいた。

私の分野は音楽であり、その中でもジャズパフォーマンス科という学科に所属している。ジャズは元々西洋音楽と黒人霊歌などの土着的な音楽が融合して生まれた音楽である。その出自ゆえ、柔軟でさまざまな文化を取り入れやすく今なお変化しているアメリカにおける代表的なアート・フォームの一つである。「スタンダード」と呼ばれる曲たちを知っていれば、言葉が通じなくとも一緒に「セッション」ができる、そういった世界である。そのためジャズという共通言語を持つ私はクイーンズカレッジ内のみならず、ニューヨーク中のジャズ科の大学生、プロのミュージシャン、はたまた路上で知り合った音楽家たちと交流をしていた。音楽が世界における共通言語であることは日本にいる時から意識していたことではあったが、留学してから音楽以外にも人類には共通言語があることを知った。そう、それは「食」であった。

友人と会話をしていると、必ずといっていいほど食の話で盛り上がる。「うちで地元の料理を振る舞うから、ぜひ遊びに来てよ！」と誘われ、たくさんの国や地域の郷土料理をいただいた。ニューヨークという多種多様な人種が共存する街だからこそだと思うが、イスラエル人の友人は「フムス」というひよこ豆のペーストを、韓国人の友人は「純豆腐」や「トッポギ」を、ドイツ人の友人はヴィーガン料理を、アメリカ人の友人は自家製ハンバーガーを、それぞれ振る舞ってくれた。この街では人を自宅に招いてご飯を振る舞う「ホームパーティー」が一般的で、わたしは彼らが振る舞ってくれるご飯を食べながら彼らの生まれ育った街について知ることが何よりも楽しかった。そして彼らは私に言うのであった。「あなたの生まれ育った街について知りたい、日本食を食べたい！」と。

同じ大学院に通う日本人の生徒とルームシェアをしていたので、私たちはお返しをするべく日本食パーティーを企画した。これまで自宅に人を招いて料理を振る舞った経験がなかった私はいささか緊張していたが、これは埼玉親善大使として埼玉県をアピールする良い機会であると思い「みそポテト」と「さつまいもご飯」を振る舞うことにした。特に秩父の郷土料理である「みそポテト」は、じゃがいもを使った郷土料理は世界中にあり、どんな民族も身近な野菜であることも相まって非常に好感触だった。私はこの料理が自分の地元のものだと話すと、興味を持ってたくさんの質問をしてくれた。「他にはどんな料理が有名なのか」「東京にはどれくらい近いのか」「アニメにサイタマというキャラクターが出てきたが、それと同じ名前なのか（ワンパンマンという作品の主人公だそう）」「その街ではジャズはどれくらい盛んなのか」など、個性豊かな質問があり、埼玉という土地に興味を示して知ろうしてくれたことがとても嬉しかった。

音楽の面では5月に行われた「ジャパンデー」という大規模なニューヨークでのイベントの目玉である「ジャパンパレード」にて出演した。2万人を超える観客の前でジャズアレンジで日本の有名な歌謡曲やアニメソングなどを演奏し、たくさんの人が話しかけてくれた。中でも私が埼玉出身だと伝えると、「実は学生時代に埼玉大学に留学していたんだ」と言ったアメリカ人の方はとても嬉しそうに留学時代のことを話してくれた。

渡米前には日本人であること、そして埼玉出身であること特別に意識する機会はほとんどなかった。しかしこうして留学してみると、多様な価値観や文化の中で「自分はどういう人間なのか？どんなル一ツを持っているのか？」と意識せざるをえない瞬間が多くあった。そんな時、自分の出身やそこの文化、歴史などは自分を形作る大切と要素となり、海外生活の中での支えになっていると感じた。音楽と食という二つの共通言語を盾に修士課程の残り一年、この街で音楽の道を志す学生として今後も一層努力を重ねていきたい。